

近隣の自然の変化に目を向ける No. 56

「夏本番: 夏の虫たち、果実: Hot summer: summer insects & berries」

2021年8月5日

関東地方の今年の梅雨明けは7/16であった。それまでの日々、梅雨前線が線状降水帯として次々に日本列島を通過、停滞し、各地に記録的な豪雨をもたらした。梅雨明け前日に雷が鳴り、翌朝真っ青な空の陽の下、カーと暑い夏がやって来た。このような劇的变化は、子どもの頃の梅雨明け／夏休みの始まりを思い出させる。里山にはニイニイゼミから始まってアブラゼミ、ミンミンゼミが鳴き出し、ツクツクホーシが鳴けば夏休みは半ば。やがて、ヒグラシの声が夕方聞こえて来ると、真夏の池の水辺を飛び交っていたトンボも見かけなくなり、もう夏休みはおしまい……であった。

話は今の芦花公園：毎朝、数10匹ものアブラゼミが賑やかに鳴き、あちこちの枝木に羽化した後の抜け殻が見つかる。ラジオ体操の後、樹木を廻ながらセミ殻を熱心に集めている人たちがいる（実は体操の仲間）。何のため？漢方薬の材料とする夫人のために仲間が遊びがてら協力しているのだ。途中、羽化したばかりのセミを見かけることがあり、新たな命の神秘を感じている。

今回の特集は、木の実と食べられる実（ベリー）。

木の実さがしをしていたところ、芦花公園内にエノキ（榎）の大木がある事が分かり、感激。名の由来は夏を象徴する木かと思いきや、夏に日陰を作る樹を意味し、和製漢字であると言う。各地の神社に御神木として植えられている。果実は食べられ、味は甘い。すぐ近くに榎という地点（バス停）があるので、親しみが湧いた。

ハウノキ（朴の木）の白い肉厚の花は泰山木に似て優雅だが、実は食べられない。

ボケ（木瓜）の実が固く、野の獣も鳥も食べないようだが、実は梅酒と同じ味の果樹酒となる（体験済み）。

モミジバ フウ（紅葉葉 楓）は、トゲトゲの栗に見えるが、秋には赤褐色の実として地に落ちる。アクセサリーの材料としても使える。サンゴジュ（珊瑚樹）はその名の通り、赤い実がサンゴのように海中の岩のまわりに漂っているようだ。ムクロジ（無患子、soapberry）は秋になるとアメ色の実となり、皮は高貴な人だけが使える石けん代わりに、また黒い堅い種は羽子板の羽根の玉として使われていた。

食べられる実が春半ばから夏にかけ、自然界にも栽培種としても多く見ることができる。野いちご（野苺）には、うす甘酸っぱい木の実と、別名ヘビイチゴという草の実がある。どちらも可食だが、ヘビイチゴは名の故に摘んで食べる人が少ないようだ。木イチゴは果物店にも並ぶ実で、改良種が多く作られジャムやケーキ用に用いられている。グミ（栞）は俵グミと呼ばれ、昔から庭先に植えられていた。独特の渋みが今も忘れられない。桑の実も自然の恵みで、子どもの頃、口の中を真っ赤にして食べた。摘んでいる間は食べ放題のブルーベリー畑近くにあり、毎年楽しみにしている。5cm程の実がなるザクロの濃い橙色の花に目が引き寄せられた。

近所の農園で買ったビワの実が水水しく美味しかった。イヌビワはビワとは違い、イチジクに近い味がする。ジャムにすると朝食が豊かな気分になる。